

強力伝 (山岳小説)

新田次郎著 旅窓新書25

55年9月 朋文堂刊 100円

……様

新田次郎氏の本面白く読みました。まとまった時間をとって読むことができず、3日ほどかかったのですが、感想を断片的にお話ししました。貴方も是非御一読されて、御感想をお知らせ下さるのをお待ちしております。内容は「凍傷」「強力伝」「山犬物語」の三篇です。

現存される佐藤順一氏をとりあつかった「凍傷」ですが、これは佐藤氏の創設時代の富士山頂における気象観測をとりあつかったものです。確か昭和21年頃だったと思いますが橋本英吉氏が「富士山頂」で野中到氏の山頂における連続観測の創業を書きましたが、同じ系統のものと思われましょう。面白いことは橋本氏の場合この作品の発表以前に同じテーマを取扱った「富士と水銀」があり、新田氏も「文学者」に発表になったときにくらべて大巾な改稿をしているのですから、結局2人の作家が大体同じようなテーマについて二度目の作品を持ったことになるのでこんなことは恐らく前例のないことでしょう。「日本の気象」や「北方

定点」をふくめて気象台の仕事が小説や戯曲のテーマとなりうるということはかなり興味のあることですがこのことについてはそのうちゆっくり御話してみようではありませんか。

橋本氏の作品は、新田氏の今度の「凍傷」にくらべるとかなり多旋律的です。一般的に考えて多旋律の方が書くエネルギーを一層必要とすることは明らかですが、書きにくさという点から考えると単旋律の方がずっとむづかしいような気がします。画でいうと複雑に色々のものを書き込んだものより、簡単なテーマほどその上手、下手がはっきりする場合があります。これはおそらく単旋律の場合は主人公にばかりカメラ・アングルが向けられ、その行為をおっかけまわすので、傍の人物がリアルに浮び上ってこないからなのだと思います。だから新田氏の場合、一人のプロ作家がとりあつかったのと同じようなテーマを、しかもそれより書きにくい方法で後から試みたのですから、大へん大胆なくわだてであることは明らかなことでしょう。

新田氏は山や気象観測に経験が深いので、自然の描写が大へんよく書

けている点が多くありません。しかし特技がかえってわざわざして、少しくどくなりすぎている点もあるのではないのでしょうか。自然の描写に対して、主要人物以外は十分書きこなせているとは思えないので、余計に目立つのではないのでしょうか。たとえば主要人物ではないが女性の描き方など何か少し物足りない。男だけが主要な働をする小説で、たった1人か2人しか登場しない女性のとりあつかいはもっと慎重にする必要はないだろうか。山岳小説と銘打ってあるから自然と人間のバランスが普通と逆になっているのかもしれないが、しかし調和がとれてないと両方ともうまく浮び上って来ないのではないのでしょうか。田中館博士にしても読者にかなり予備知識を予想した書き方だと思えます。

それから始めに伏線にしておいて後から使う場合で2、3少し不自然に感じた所がありました。凍傷で佐藤がこわれた時計のガラスを岩の間からほり出す所、もし事実とすれば51頁の書き方は不十分ではないでしょうか。強力伝で小宮の娘の鶴子が2ヶ所に出てきますが、伏線の方の描写が生き生きしていないためか何か無理に技巧をこらしているような気がしました。

チェホフはかって「批評家は馬のお尻について繩のようなものだ」と言いました。最近ではマルセル・パニヨルの風あたりが大へん強い、彼の本の巻頭には「無智、偏見、通人氣取り、また嫉妬に対するわれら共通の戦いを記念して…」とあります。私のこんな感想も作者が見たら「おやおや」と微笑されるにちがいないでしょう。しかしこの手紙をよんで、貴方が読んでみようという気になればそれで効果は十分なのです。批評が専門でない私は、もし面白くない本なら始めから黙然してしまえばよいのですから。

1955年9月26日 杵本 俊吉

山岳小説

強力伝

新田次郎著

藤原寛人氏の処女作
著者は山岳小説の新ジャンルを開拓するに勤めた。中央学には「強力伝」が、昭和二十六年「サンデー」に「和の懸賞小説」に入選。昭和三十一年に二回と三度入選の栄を勝ち取った。「三度作家」として知られる。新進作家である。「強力伝」は「凍傷」は、気象台に奉職した著者の尊厳から生れたもの。特に気象関係の仕事に従事される方々にとつては、興味深いものである。是非一読に値する異色ある作品である。
尙職場でまとめたお買上げは、代金引換送料当社負担と見たと御一報下さい。
新書版一七〇頁 一〇〇円

東京 神田猿 楽町2-15

朋文堂

電(29)3213, 3279 振替東京25983番